Q&Aでわかる、司馬江漢と亜欧堂田善

江漢と田善が描いた「洋風画」とは、どんな絵のこと？

A 江戸時代に西洋絵画の影響を受けて描かれた日本の絵のことです。ただし、西洋の題材を日本の描き方で描いたものではなく、描き方そのものに西洋の影響がある絵がそう呼ばれています。明治時代以降の西洋流の絵は「洋画」と呼ばれますが、それと区別するために「洋風画」と呼ばれるようになりました。明治時代以降に描かれた西洋流の絵「洋画」が、西洋画そっくりに倣ったのに対し、江戸時代の洋風画家たちは、それぞれ興味を持ったところだけを取り入れました。そして、西洋にもないような個性的な絵を描いたのです。

左：司馬江漢　花鳥風景図（後期展示）　右：石川大浪・孟高　ファン・ロイエン筆花鳥図模写
秋田県指定有形文化財　秋田県立近代美術館（後期展示）

＼掛軸仕立ての油絵、かっこいい！／

亜欧堂田善　七里ヶ浜人物図（前期・後期展示）

江戸時代の油絵、どうやって飾られていたの？

A 長崎で描かれた油絵の中には、西洋画と同じような、華やかな飾りの付いた額に入れられた作品もあります。しかし、江漢と田善の油絵には、そういうものが見当たりません。額に入れられた場合でも、書を飾るのと同じような、シンプルで瀟洒な日本の額でした。また、掛軸に仕立てられたものも沢山あります。額は欄間のような場所に、掛軸は床の間に掛けられていたのでしょう。掛軸を実際に床の間に飾ってみましたが、独自の雰囲気があって、とてもかっこいいですね。

江漢と田善はプロの画家だった？

A 江漢は、自然科学や世界地理の著作も残した学者でもありました。ただ、あくまで想像ですが、仕事の中心は絵を描いて売ることだったと思われます。たとえば、長崎旅行の日記を読んでいると、行く先々で多くの注文に応じているのがわかります。田善は、紺屋の仕事をしていましたが、47歳の時に白河藩主松平定信に見出され、洋風画家の道へと進むことになりました。定信から禄をいただいたようですが、どんな形態で、いくらくらいだったかはわかりません。また、幕府の銅版世界地図や、医学者である宇田川玄真に頼まれた銅版解剖図など、単発の仕事もありましたが、それらは高額の報酬だったと想像されます。白河藩からの禄、絵や銅版画の制作など、色々なことで生計を立てていたと考えてよいと思います。

＼江漢が自作して売り出したコーヒーミル！／

上：司馬江漢　天球全図より
京都大学附属図書館（前期展示）

左：司馬江漢　和蘭陀茶臼
長崎歴史文化博物館（前期・後期展示）

江漢と田善の後、洋風画はどうなったの？

A 二人の没後も、安田雷洲や大久保一丘らが洋風画を描きました。しかし、狩野派や琳派のように一つの描き方が受け継がれることは少なく、あくまでそれぞれの画家が自由に描いていました。それが洋風画の特徴でもあります。そして明治時代になって、西洋画の世界をまるごと移植しようとした「洋画」が日本に根づき、洋風画は消えてしまいました。洋風画は、鎖国時代だからこそ生まれた創作活動だったといえるでしょう。

安田田騏　異国風景図
歸空庵コレクション（前期展示）

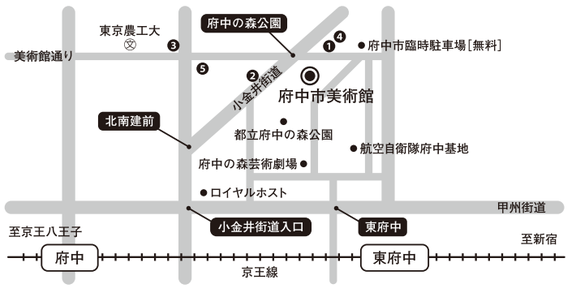
〈関連イベント〉

展覧会講座「司馬江漢と亜欧堂田善　名前も絵もかっこいい！」　金子信久（当館学芸員）
５月３日（土）　午後２時より（90分程度）　府中市生涯学習センター講堂（府中市美術館より徒歩５分）　予約不要　無料

子ども向けイベント「こうかんでんぜん探検隊！」　会期中随時　展覧会を見ながら「探検隊ワークシート」のクイズに挑戦。
観覧料が必要ですが、府中市内の小中学生は、「府中っ子学びのパスポート」で入場できます。
年齢制限はありませんので、大人の方の参加もお待ちしております。

〈交通案内〉

●京王線東府中駅北口から
・徒歩 17 分
・ちゅうバス府中駅行き「府中市美術館」❶下車すぐ（8時5分から毎時30分間隔で運行、100円）
●京王線府中駅からバス
・ちゅうバス多磨町行き「府中市美術館」❶下車すぐ（8 時から毎時 30 分間隔で運行、100 円）
・武蔵小金井駅南口行き（一本木経由）「天神町二丁目」❷下車すぐ
・武蔵小金井駅南口行き（学園通り経由）「天神町幼稚園」❸下車徒歩 8 分
・国分寺駅南口行き（東八道路経由）「天神町幼稚園」❸下車徒歩 8 分
● JR 中央線武蔵小金井駅南口からバス
・府中駅行き（一本木経由）「一本木」❹下車すぐ
・府中駅行き（学園通り経由）「天神町幼稚園」❺下車徒歩 8 分
● JR 中央線国分寺駅南口からバス
・府中駅行き（東八道路経由）「天神町幼稚園」❺下車徒歩 8 分
● お車の場合は、美術館近くの府中市臨時駐車場（無料、54 台収容）をご利用ください。



府中市美術館
Fuchu Art Museum
東京都府中市浅間町 1-3
ハローダイヤル 050（5541）8600
https://www.city.fuchu.tokyo.jp/art/

表紙：亜欧堂田善　両国図（部分）　重要美術品　秋田市立千秋美術館（前期・後期展示）

司馬江漢と亜欧堂田善

しばこうかん　あおうどうでんぜん

かっこいい油絵

春の江戸絵画まつり

2025
3.15 SAT ——
5.11 SUN

前期　3月15日（土）—— 4月13日（日）
後期　4月15日（火）—— 5月11日（日）

作品の大幅な展示替えを行います。
詳しくは当館ホームページをご覧ください。

2度目は半額！　観覧券をお求めいただくと、2度目は半額になる割引券が付いています（本展１回限り有効）。

休館日：月曜日（5月5日をのぞく）
開館時間：午前10時—午後5時（入場は4時30分まで）
観覧料：一般800円（640円）、高校生・大学生400円（320円）、
小学生・中学生200円（160円）＊（　）内は20名以上の団体料金。＊未就学児無料。
＊障害者手帳等（ミライロID可）をお持ちの方と付き添いの方１名は無料。
＊コレクション展もご覧いただけます。
＊府中市内の小中学生は「府中っ子学びのパスポート」で無料。
主催：府中市美術館　＊本展の他会場への巡回はありません。

府中市美術館
Fuchu Art Museum

西洋画から着想を得て、ユニークな画境を拓いた異才

A

B

C

D

E

F

／府中の“モナリザ”！＼

／長崎旅行で、大迫力の鯨漁を見物！＼

司馬江漢

1歳 ｜ 延享4年（1747）
江戸・四谷に生まれる。
＊翌年に生まれた可能性もある。

19歳 ｜ 明和2年（1765）
この頃、浮世絵師の
鈴木春信に入門するという。

春信の名で代作したこともあり

20代後半
宋紫石に中国風の花鳥画を学ぶ。

30代前半
平賀源内や小田野直武と出会い、
西洋の絵画に興味を持つ。

35歳 ｜ 天明元年（1781）
この頃から、洋風画を描くようになる。

37歳 ｜ 天明3年（1783）
日本初の腐蝕銅版画を制作する。

38歳 ｜ 天明4年（1784）
銅版眼鏡絵とのぞき眼鏡をセットで売り出す。

42歳 ｜ 天明8年（1788）
長崎旅行。翌年4月に江戸に帰る。

長崎は蘭学者の憧れの地！

44歳 ｜ 寛政2年（1790）
長崎旅行の様子を綴った『西遊旅譚』完成。
同6年に刊行か。

46歳 ｜ 寛政4年（1792）
銅版の世界地図《輿地全図》とその解説書『輿地略説』を刊行。

50歳 ｜ 寛政8年（1796）
銅版の星座図《天球図》と『和蘭天説』をセットで刊行。

69歳 ｜ 文化12年（1815）
長崎への旅行記を再編集した自筆の『西遊日記』完成。

享年72 ｜ 文政元年（1818）
10月21日、没。
江戸・深川の慈眼寺（現在は豊島区巣鴨）に葬られる。

A：猫と蝶図　府中市美術館（前期展示）　B：円窓唐美人図　府中市美術館（前期・後期展示）　C：両国図（風景図巻より）（後期展示）　D：三囲之景　本間美術館（前期展示）　E：皮工図　府中市美術館（前期展示）　F：捕鯨図　土浦市指定文化財　土浦市立博物館（前期・後期展示）　G：寒柳水禽図（後期展示）

G

1750　1760　1770　1780　1790　1800　1810

浮世絵　中国風絵画　洋風画の時代

染め物業　洋風画の時代

1750　1790　1800　1810　1820

亜欧堂田善

1歳 ｜ 寛延元年（1748）
陸奥国白河藩領の須賀川に生まれる。

8歳 ｜ 宝暦5年（1755）
父が没し、兄が営む紺屋を手伝うようになる。

44歳 ｜ 寛政3年（1791）
兄が没し、紺屋を継ぐ。

これより前に、伊勢の画僧・月僊に学んだと伝えられる

47歳 ｜ 寛政6年（1794）
白河藩主・松平定信に起用され、
谷文晁に師事する。

50歳 ｜ 寛政9年（1797）
遅くともこの年までに、
銅版画の制作に成功。

器用すぎて、技術者に起用！

53歳 ｜ 寛政12年（1800）
年紀のある最も早い作品《海浜アイヌ図》を制作。

58歳 ｜ 文化2年（1805）
銅版画《驪山比翼塚》を制作。

61歳 ｜ 文化5年（1808）
宇田川玄真の医学書『医範提綱』に
付属する解剖図を銅版画で制作。

67歳 ｜ 文化11年（1814）
須賀川の俳人による俳諧撰集『青かげ』の挿絵として、
銅版画《陸奥国石川郡大隈滝芭蕉翁碑之図》を制作。

69歳 ｜ 文化13年（1816）
この頃、幕府天文方編纂の地図《新訂万国全図》が、
田善の銅版印刷により刊行される。

享年75 ｜ 文政5年（1822）
5月7日、須賀川で没。
須賀川の長禄寺に葬られる。

A：海浜アイヌ図（前期・後期展示）　B：洋犬母子図（後期展示）　C：驪山比翼塚（銅版画見本帖のうち）　重要文化財　須賀川市立博物館（後期展示）　D：七里ヶ浜人物図（前期・後期展示）　E：新訂万国全図（部分）　府中市美術館（前期・後期展示）　F：墨堤観桜図（前期・後期展示）

＼制作年がわかる最も早い銅版画／

A

B

C

D

E

／間宮林蔵の樺太探査の成果も反映！＼

F

油絵といえば西洋のもの、というイメージがありますが、江戸時代の日本でも描かれていました。鎖国下でも交流のあったオランダや中国を通じて、少ないながらも油絵が輸入され、それをまねて描く画家がいたのです。代表的な画家が、司馬江漢と亜欧堂田善の二人です。

ただし、二人の油絵は、私たちのよく知る油絵とは、かなり違います。荏胡麻（えごま）の油などを使って自分で調合した絵具で、日本で古くから使われてきた薄くて繊細な絵絹（えぎぬ）に描いているので、滑らかでさらりとして、明朗かつ落ち着きのある色をしています。飾れば、西洋風とも日本風とも言えない不思議な雰囲気が醸し出されたでしょう。

当館では色々な展覧会で二人の油絵を紹介してきましたが、作品をご覧になっている方からよく聞こえてきたのが、「かっこいい」という言葉でした。きっぱりとした水平線の上に広大な青空が広がる江漢の風景画、遠近法を使って果てしなく景色が続く様子を描いた田善の作品。どちらにも西洋の画法への興味がストレートに表れていて、西洋や明治時代以降の重厚で複雑な油絵とは異なる魅力を持っています。それが新鮮に、潔く感じられるのかもしれません。近代以降、「稚拙な段階の西洋画」というレッテルを貼られた二人の作品ですが、今、私たちが感じるような心地良さや、「きれい！」という感激こそが、江戸時代の人々が味わっていた趣に近いのではないでしょうか。

この展覧会では、油絵だけでなく、銅版画や、墨や在来の絵具を使った作品もご覧いただきます。そして、二人の生い立ち、画家としての立場や環境の違い、目指すものの違いにも注目します。科学者であり文人でもあった江漢と、幕府老中もつとめた白河藩主松平定信のもとで黙々と技術を極めた田善。二人の違いが作品にどう表れているかも、大きな見所です。

江戸絵画ブームとも言われる昨今ですが、江漢や田善に興味を持つ人は多くはないようです。そのせいか、展覧会が開かれることは稀です。特に江漢の展覧会は、2001年に当館で開催してから一度もありませんでした。次はいつ開かれるか……。ぜひこの機会にご覧ください。